

先生と呼ばれて

若林 亨

いつものようにゴミ箱のゴミを回収用の大袋に入れてくるみは三〇一号室を出ようとした。絹江はベッドで寝ている。あえて声をかける必要もない。

——絹江さんの部屋は殺風景だわ。

部屋に入るたびそう思う。備え付けの洋服ダンスの他はポータブルトイレと三段ラックがひとつあるだけ。なのでゴミ箱がやけに目立っている。着替えの衣類はひと通りそろっているがタンスの中に入っているの目につかない。紙パンツやおしりふき、パッドなどかさばるものはトイレの中に入れてあるのでこちら目につかない。三段ラックにはセロファンテープ、養生テープ、輪ゴム、ティッシュとマスクの替え、使い捨ての紙コップと皿、スプーン、ストロー。必要最小限のものしかない。

「先生、ありがとうございます」

絹江の祈るような小さな声がしたのでくるみは振り返った。

絹江は誰に対しても先生と呼びかける。特に世話をしてくれる人には必ず先生だ。だからくるみも先生だった。

掛け布団の足の方が少し膨らんでいるのが見えた。自力で立ち上がりとしているのだろうか。それなら介助が必要だと絹江に歩み寄ろうとした時、ゴロゴロと大きな音がしてドアが開いた。

「あら、お邪魔だったかしら」

絹江の長女陽子だ。ノックもせず乱暴にドアを開けて大股で入って来る。身長も体重もLサイズの陽子はくるみにとっては威圧感でしかない。押し付けてくるような野太い声も苦手だった。

「入居者のみなさんには少しでも快適に過ごしていただけるよう努めてください。同様にご家族の方にも丁寧な対応をお願いします」

統括主任の今朝の訓示。介護職員として働き始めたばかりのくるみにはそれが当然のことだ。短大を出て初めての就職先だったからなおさらのことだ。

「ゴミを集めに来ただけですから」

くるみは陽子に微笑んだが、陽子は無視して絹江に近づいていった。

「おかあちゃん、来たでー」

その声を聞いてくるみは部屋を出た。

それから三日後のことだった。

おやつの時間になったので迎えに行くと言った絹江は車椅子に座って外の景色をながめていた。陽子が来たのだとすぐに分かった。昼食の後は入居者を食堂に集めてその日のおやつを食べてもらおう。その間に部屋の掃除に回る。絹江はテレビを見るのが好きなのだ。内容は分か

らなくてもにぎやかな方がいいと言っている。外を眺めたいとは言わない。外へ出たいとも言わない。

それがこの日は窓から外を眺めている。しかも窓が少し開いている。もともと安全のため十センチほどしか開かないのだが、まだ外気が冷たいので入居者が部屋にいる時は開けないことになっている。

ラックの上に写真立てが置いてあった。昨日まではなかった。写真には陽子と中年男性、それに二十歳ぐらいの女子が写っている。写真立ての木枠には、陽子、恭一、くるみと書かれてある。陽子の夫と子供なのだろう。

——お孫さんはわたしと同じ名前なのね。年も同じくらいだわ。

くるみはさらにその横にあるトランプも気になった。ケースから出されていて、一番上のハートのクイーンだけが斜めにずれている。

——トランプが好きなのかな。

「三時のおやつですよ。みんな一緒に食べましょうね」

そう声をかけると絹江は「先生、ありがとうございます」と言っで自分で車椅子を回そうとした。めずらしいことだ。いつもは頼りっぱなし。リハビリになりますからがんばってくださいと言っでも自分から動こうとしない。お願いしますと頭を下げてる。

「トランプ好きなんですか」

くるみは思い切っで聞いてみた。写真のことより聞きやすかった。トランプ占いなら何種類もやったことがある。

「ほら、あそこにありますよね」

くるみは指さした。しかし反応がない。それどころかせっかく自分で動かそうとした車椅子をとめてしまった。仕方なく食堂まで押していこうとすると、「おひめさん」と絹江がつぶやいた。慌ててくるみは車椅子を部屋の中へ向けた。

「おひめさん、おひめさん」

絹江はトランプを指さしてそう繰り返す。とても興味深そうだ。

くるみは一番上のハートのクイーンだけを手に取っで絹江に渡した。すると今度はクイーンの外枠の波線を指でたどりながら「おひめさん」を繰り返す。そのたびに前のめりになり背中が丸くなっでいく。

その姿は飼ひ猫をかわいがっているようにも見えた。孫をかわいがっているようにも見えた。

同時に殺風景な部屋だなど改めて思った。

——もう少し生活感があればいいのに。

くるみは食堂へ連れ出すタイミングをつかめないでいた。

もつともつと積極的に話しかけてねと主任は言うが、くるみには積極的という意味が理解できないでいた。要介護三以上で不自由の多い高齢者に対してどう接したらいいのか分

からない。入社一ヶ月ではまだ先輩職員の指示に従って言われた通りのことをやっているだけだ。日勤のみの勤務なので施設全体の動きは分からないし、顔を合わせたことのない職員も多い。玄関ホールに貼られた全職員の顔写真を見る限りでは自分が一番若そうだ。日勤の若い子は他に三人いたが、みんな髪の毛を染めていて化粧も厚く、とんがっている感じがする。友達になれそうにない。そんな子たちも入居者の前では笑顔で愛想よく振る舞っている。でもくるみの前では無愛想だった。そのところもよく分からない。心配しなくてもすぐに慣れるわよとペアを組んでいる先輩は励ましてくれるが、先輩たちの仕事ぶりは猛烈に早く見えた。みんな大股で歩いている。声が大きくて力も強い。同時にふたつの車椅子を押している。つま先を使っている人もいる。部屋の中のを大幅に移動させて清掃したあと元に戻さずそのままにしておく先輩もいて最初はびっくりしたが、寝たきりの入居者には全く影響のないことだと分かるようになる。その方が時間の節約になる。絹江の部屋に新品のトランプが置かれていた。まだ封が切られていなかった。勝手に開けることも出来ずしばらくそのままにしておいたが、ある日絹江が天井に向かって「おひめさん、おひめさん」とつぶやくのを聞いて新しいトランプを手渡してみた。すると絹江はセロファン包装を指でひっかいて破こうとする。しかし力が足りない。爪も伸びていない。なかなかあきらめない絹江を見ているうちにくるみはちよつときみしくなり、開けましようかと声をかけた。すぐに絹江はトランプをくるみに渡した。

「三〇三と三〇四はシート交換終わったから床とトイレお願いね」

ペアの先輩が部屋を覗きこんで声をかけてくる。早くしろというわけだ。

くるみは急いでセロファンの包装を解き、ケースの中からカードの束を抜き取って絹江に手渡した。紙製の軽いトランプだった。すんなりと手になじむような気がした。

くるみは次第に三〇一号室の絹江を気にするようになった。自分が一番頼りにされているのだと思った。食事の時間になるとまず最初に絹江を食堂へ連れて行き食堂の電気を付けてみたがそれは勇み足だった。看護師のOKがないとだめだと注意された。なので最後にゆっくり連れて行くことにしたが、それはそれでその後の予定を遅らせてしまうんじゃないかと心配にもなる。でも推しができたことはうれしかった。慣れるというのはこういうことなのかなと思った。

そんな矢先、絹江に変化が起こった。

突然、イノシシやと叫んで両手で顔を覆う。

なにかのおまじないなのか。

訪問診療にきたドクターは自傷行為がなければ特に問題はありませんと言いながらも薬を増やした。落ち着いてもらうことが一番だということで常駐看護師の見回りを増やし、部屋で食事を取ってもらうことになった。なるだけ静かな環境で過ごしてもらうようにとの配慮だったが、結局は他の入居者に迷惑がからない措置だ。それくらいはくるみにも分かった。

絹江の部屋は常に照明が消されていて、曇りの日はかなり暗くなっていた。くるみはなん

とか元気づけようとする日、絹江に写真立ての写真を見せながらお孫さんかわいらしいですと声をかけてみたが、すぐさま「来てくれへんわ」と返ってきたので慌てて写真を元に戻した。余計なことをしたと思い、とっさに新しい方のトランプを手に取って絹江に渡すと絹江は両手で包み込むようにして受け取り、数字を下にしておもむろにトランプを繰り始めた。

骨ばかりが目立つ細長い指がしなやかに波打ち、その指に吸いつけられるようにしてトランプは上へ上へときれいに繰られていく。一度繰り終わればまた最初から繰り始める。まるで羽が生えたかのように一枚一枚のカードは宙に浮いてふわりふわりと重ねられていく。くるみは目を見張った。同時にうれしさがこみ上げてきた。見事な手さばきを眺めているうちにそれが自分の手柄のように思えた。トランプを束ごとポイと床に投げ捨てられたらどうしよう、カードが床に散らばったらどうしようと思像した自分が恥ずかしくなった。

くるみに自信がついてきた。自分に合っている仕事かどうかはまだ分からなかったが、とにかく毎日入居者の世話をしていることに充実感を覚えていた。

ただ陽子のが気になっていた。他の入居者家族はほとんど顔を見せないのに陽子だけは週に一回やってくる。愛想の悪さは相変わらずで部屋で何をしているのか分からないが、陽子が来た後の絹江の様子がおかしいのだ。

この前もそうだった。頼んでおいた柔らかいクッションを持ってきてくれたのは良かったが、それを車椅子の背に当てる絹江を座らせていた。前かがみを直すために胸の前で抱えてもらおうと思っていたのに背中に当てるものだから絹江はさらに前かがみになってつらそうにしていた。

ゴミ箱の中も気になった。ティッシュやマスクに混じって鎮痛剤のケースが捨ててあったのだ。絹江の薬は施設で管理しているから陽子が自分で使ったものだろうが、その日からしばらく絹江に下痢が続いた。

不安に思いつつも、娘さんが来られるから安心ですねと絹江に声を掛けてみるが反応はなく、逆に固まってしまう。そんな時はトランプを渡してもだめだった。受け取りもしない。ハートのクイーンを見せても何も言ってくれない。

「先生ありがとうございます」

いつものこの声が聞きたかった。

毎年恒例の夏祭りが近づいてきた。くるみは初めてなので長年の入居者から教わることもあった。倉庫の中の備品の位置まで知ってる人がある。団扇は脚立に乗らないと取れないわよと。ダンボール箱は軽いものばかりで助かったが、食堂の隅にきれいに積み上げないといけないので苦労した。くるみの仕事はその程度だった。風鈴や旗の飾り物は慣れた職員が手際よく紐に通してカーテンレールにつないでいたし、食事の用意は食事係の職員がやっている。事前に夏祭りの新たな企画募集メールが届いていたが結局例年通りの内容になったようだ。

「あたしたちに出来ることは限られてるのよ」

同僚の若い子からは何度もそう言われていた。それでもくるみは自信を持って働きたいと思っている。入居者には元気でいてほしいし、笑顔を見せて欲しい。たとえ寝たきりでもマヒがあってもふと穏やかな表情をみせてくれる。そんな時はくるみもうれしくなる。経験を積んで指導員になるのもいい。

夏祭りが終わりお盆も過ぎた頃に絹江の部屋から写真立てがなくなった。くるみはすぐに気がついた。

施設では六ヶ月前から勤務シフトが組まれているのだが、新入社員のくるみにはリフレッシュ休暇が与えられていて一週間のお盆休みのあと仕事に戻ったら写真立てがなくなっていたのだ。

場所が変わったわけではない。ラックの上以外に置く場所がないから。

気になったが絹江本人には確かめなかった。いや、確かめられなかった。

くるみが休んでいる間に絹江が体調を崩していたからだ。またしても下痢が続き体力が落ちていた。ベッドから自力で立ち上がることが出来なくなっていた。「ここで死ぬんですね」と言うようになり、その声もか細くて聞き取りにくかった。点滴で様子をみている。食事はペースト状にして全面介助。誤嚥に注意。

くるみはベッドに近づいておもむろに絹江の顔をのぞきこんだ。

「先生、ありがとうございます」

絹江ははっきりした声でそう言った。

目をぱちぱちさせてもう一度はつきりと「先生、ありがとうございます」とくるみに向かって言った。自分にだけ言ってくれるのだと思ったかった。

ドクターが帰ったあと、すぐに黒っぽいスーツを着た男二人がストレッチャーを転がしながらやってきた。その前にロビーにいた入居者を全員部屋へ戻すよう指示が出ていた。施設長と指導員は玄関に立っている。大きい方のエレベーターの前にも職員がひとり立っている。亡くなった人が運ばれていくのだ。このような時の行動マニュアルはあらかじめ決められていたが、職員全員がその通りに動いているわけではなかったのだからどこにいればいいのか分からなくなってしまった。

しばらくすると白い布でぐるぐる巻きにされたものがストレッチャーの上に載せられ、目の前を通り過ぎていった。白い布は薄く盛り上がっていた。仏像でも運んでいるかのようだった。

絹江の容態は安定していたが、整腸剤が効き過ぎたのか今度は便秘になり水分補給が欠かせなくなった。ストローを口元まで持つていくと必ず、「先生ありがとうございます」と言ってくれるが、あとが続かない。

「腹を立ててもいいのよ」

先輩の言葉はその通りだ。実際めんどくさい入居者もいる。用もないのにコールをくり返したり泣き出したり死にたいと言い出したり。冷静さを装っているうちにうわべだけの

対応になっているのかもしれないと反省する。

「あせらなくてもいいのよ」

これもその通りだと思う。

わたしはあせている。絹江さんにあせている。なんとか元気になってほしい。元気になってまたトランプを繰ってほしい。見事な手さばきを見せてほしい。笑ってほしい。喜んでほしい。

——だって推しなんだから。

ある日陽子が絹江を外へ連れ出した。天気がいいので散歩してくると言って勢いよく車椅子を押していった。

くるみは不安だった。絹江の体調が良くなってきたからだ。

くるみは絹江を奪われた気分になった。

陽子は娘。自分は施設の介護職員。身内の方がいいに決まっている。娘ならばなおさらのことだ。分かっているがもはやした気分だった。

ふたりの散歩は十分ほどだった。帰ってくると陽子はロビーで洗い物をしているくるみに向かって「あとはよろしくね」と言って車椅子を押しつけてきた。

「涼しくて気持ち良かったでしょう」

「まあね」

「お母さんも気分転換が出来て良かったですね」

「そうね、あとはよろしく」

話するのはめんどろだとばかりに陽子はくるつと体を回転させてせわしくエレベーターに乗り込んでいった。

絹江は明らかに疲れた様子だった。前かがみがひどく、膝の上に顔をぶつけそうになっている。

くるみは絹江の部屋から柔らかなクッションを持ってきて膝の上に抱きかかえさせた。

「しんどくないですか」

「先生、ありがとうございます」

「横になりましたか」

「ありがとうございます」

やはり絹江は体調を崩していた。熱が三十八度あり、飲み物も受け付けなかった。血圧や脈拍は正常だったその日は看護師の指示で解熱剤を飲ませただけで終わったが、翌日になってもぐったりしていたのでドクターの出番となった。

全体に衰弱しているのでこのままだと寝たきりになるかもしれない。あとは本人の生命力。回復の見込みはあるが全面介助は避けられず、栄養の取り方も考えないといけない。例えば胃ろうという選択肢も。

「ご家族に説明しないとな」

そう言ったところでドクターは看護師に目を向けた。

「はい」と看護師はうなずいた。

同席していたくるみは胸が痛くなった。臨終に立ち会っているような気分だった。

ローカから同僚が手招きしている。そうだ、仕事に戻らなければ。

それからしばらく絹江の容態に変化はなかった。特に新たな治療をするわけでもなくリハビリするわけでもなく、ただ見守っているだけの重苦しい日が続いた。

陽子はドクターからの説明を受けていた。毎日やってきて三十分ほど部屋にいるが何をしているのか分からず、説明にどう答えたかも分からない。

陽子が帰った後の絹江に変化はなかった。もう変化するだけの体力すら残されていないのだろう。まぶたを閉じ、半開きの口で薄く息をしながらただじっとしている。臨終の瞬間を待っているかのようだ。

くるみは毎日祈っていた。どうか絹江さんが回復しますように。起き上がれますように。笑えますように。

そしてもう一度「先生、ありがとうございます」と言っただけだった。

絹江の部屋に写真立てがふたつ並んでいた。これまでの家族写真が復活して、その横にくるみのポートレートが立てかけられてあった。ポートレートの外枠には、『くるみ 二十歳』とマジックで大きく書かれてある。

ポートレートのくるみは笑っていた。写真館で撮ったのだろう。いかにも記念写真らしく、薄いピンクのまだら模様を背景に胸から上のくるみがこちらを向いてにっこり微笑んでいる。姿勢だから卒業式か成人式か。やけに顔が大きくて丸いほおが薄紅のチークで強調されている。顔だけを写しているようにも思える。はにかんでいるのが可愛い。

健康回復の願いが込められているようで、絹江の部屋が少し明るくなった気がした。

絹江さんは孫のくるみちゃんが好きなんだ。くるみちゃんが会いに来ればすぐに元気になるはずだ。でもくるみちゃんはお孫さん。どうしてだろう。同じ名前でもわたしではダメ。わたしは他人。くるみちゃんはお孫さん。わたしがくるみちゃんの代わりになれるはずもない。

並んでいるふたつの写真は何かが違っている。写真そのものではない。写真立てが違っているのだ。

くるみはそのことに気づいていなかった。

その日は週に一度のレクレーションの日だった。熱が下がって食事も取れるようになったので絹江にも参加してもらうことになった。くるみは絹江の部屋をノックした。そしてドアを開けた瞬間立ち尽くしてしまった。

陽子が絹江の首に手をかけているのだ。

ベッドの真上から両腕を伸ばし、体重をかけて絹江の首を絞めている。渾身の力を込めて絞め上げている。

くるみの目にはそう映った。

「何してるんですか」

大きな声を上げてくるみは陽子に近づいた。

「あら、いつもお世話になってるわね」

陽子のはのっぺりと振り返った。普通の顔をしていた。

くるみは陽子の両手を確認した。

確かに手は首にかかっている。けれど力が入っていない。軽く肩に置いていっただけ。首筋を
もんでいっようにも見える。

はーっと息を吐いてくるみはその場に崩れ落ちそうになった。

「今日は何があるの？」

陽子が聞いてきた。

「え、ええ、体操が」

「体操って、こんな状態で何するのよ」

陽子はベッドの絹江を指さして言った。

「だいぶ回復されてますから」

「回復ってまだ寝たきりよ」

「ええ、それはそうなんです。驚くほどの回復ということ」

くるみはドクターの言ったことをそのまま口にした。実際絹江は驚くほど回復して体を
起こせるようになっていた。でもさすがに体操は無理だ。手のひらでグーとパーをくり返す
のが精一杯。それさえだめな時もある。

「それじゃあ頼むわね」

いつもの調子で軽く声をかけて陽子は帰っていった。

くるみの脱力感はずいぶん消えなかった。陽子に対して勘違いしたことが心苦しかった。
がんばっている自分がどこかへ行ってしまうようで悲しくなってきた。

同僚の子には相談できなかった。以前絹江のことを少ししゃべった時、「え？ 推しなん
か作ってたの？」と笑われた。「力入れ過ぎじゃん」と軽くなされた。指導員なら何かア
ドバイスをくれるかもしれないが、これくらいのことでは相談していたらこの先やっていけ
ないような気がする。

もつとがんばろうとくるみは思った。今日のことはちょっと早とちりしただけ。絹江さん
はこれからもつと回復してまた笑顔を見せてくれるはず。見事な手さばきでまたトランプ
を繰ってくれるはず。

わだかまりを持ちながらもくるみは黙々と日々の業務をこなした。

「先生、先生」と呼ぶ声が聞こえる。くるみはローカを走る。けれど近づけない。三〇一
号室のドアは見えているのになかなかたどり着けない。

「先生、ありがとうございます」

絹江は何度もそう言う。目は閉じたままだが口は動いているし喉も動いている。

くるみは声をかけようとする。けれど言葉が出てこない。

「おひめさん」

絹江は掛布団から手を出して宙に浮かせている。手のひらをひらひらさせて何かをせがんでいる。くるみはハートのクイーンを探す。ラックの上にはない。部屋中探しても見つからない。

「くるみちゃん」

絹江は孫の名前を呼ぶ。これまでにない甘い声でこっちへおいでと呼んでいる。くるみははいと答える。けれど心の中で答えているので絹江には届かない。

「くるみちゃん、くるみちゃん」

絹江の声は次第に大きくなる。それが幾重にもこだまして部屋の中を満たしていく。

部屋は「くるみちゃん」でいっぱいになり、はち切れそうになっている。それでも絹江は呼び続ける。声が止めば絹江も消える。黒服の男たちが現れる。ストレッチャーがやってくる。ぐるぐる巻きにされる。運ばれていく。

「くるみちゃん」

今度は悲しそうな声で呼びかける。最後のお願いかもしれない。

くるみは絹江の顔に自分の顔を近づけ、写真のくるみちゃんと同じようにほおを緩ませてはにかんだ。

「はい、孫のくるみですよ、来ましたよ」

その声をかけると同時に絹江の顔がゆがんだ。

「違う！」

叫んだきり動かなくなった。

写真のくるみちゃんは笑い続けている。もう自分の名前は呼ばれないと分かっている。それでも笑い続けている。

くるみもはにかみ続けている。もう先生と呼ばれないと分かっている。それでも絹江に向かってはにかみ続けている。

くるみちゃんの写真には黒い縁取りがされていた。